客家（Hakka）を通して見えてきたもの
―中国という国を再認識する―

秋　保　　哲

2006 年から 2012 年までの 6 年間、福建省アモイ市に滞在する機会を得た。アモイといえば、現在中国のトップである習近平中国共産党総書記が 1985 年 6 月から約 3 年間副市長を務めた場所である。その後、2002 年 10 月に浙江省に転出するまでの 17 年を超える期間、彼は福建省でキャリアを積むことになる。

福建省がどのような場所かを語る際に欠かせないのが台湾との関係であり、客家というエスニックグループの存在である。本稿ではその客家に焦点を当てながら、中国を見る際の視点について考えてみたい。

客家とはどのような人たちなのか

中国には漢族の他に 55 の少数民族が居住するが、客家は漢族の支族である。「客」というのは地元を意味する「土」とは反対の意味で、彼らが外から来た民であることを示している。中国・客家学の祖である羅香林によれば、中原（黄河流域）から「五度」の大移動で中国各地に移り住んだとのことである。その主要な移住先は、広東省、福建省、江西省の境界エリアだ。広東省の梅州、福建省の龍岩と寧化、江西省の贛州における漢族の 90%は客家で、世界に散らばる客家の殆どがこれらエリアの出身者だと言われている。

客家は中国東南部を中心に住みながら、日常的に使っているかは別にして、福建語や広東語とは異なる独特な言語を持ち続けている。話は脱線するが、その言語は日本語の発音に似た部分があり、「ありがとう」は「シャシャ（謝謝）」であり、「いち、に、さん、し」は「イッ、ニー、サーム、シー」である。客家語は分類的には古い中原語（黄河流域の言葉）で北京官話を用いて行われる科挙（中国の高級公務員試験）には有利であったという。

高木桂蔵氏によれば、客家の精神は（1）強い団結心、（2）進取・尚武の精神、（3）文化・伝統保持への自信、（4）教育の重視、（5）政治への強い指向性、（6）女性の勤勉性に特徴があるという（高木『客家』講談社 1992 年）。その影響からなのか、客家女性は纏足（てんそく）をしなかった。その点について司馬遼太郎が「ともかくも六、七百年、すべての漢族女性に後天的奇形を加えたこの風習に、福建人と客家だけはなじまなかったのである」（司馬『中国・閩のみち』朝日新聞社 2005 年）と指摘している。

客家の代表的人物

客家だと言われている歴史的著名人を紹介しよう。国内では、太平天国の洪秀全、辛亥革命の孫文等が挙げられる。公式文書には記載がないが、改革開放の「総設計師」と呼ばれた鄧小平もその一人である。また華人として海外に根付いた客家としては、台湾の李登輝（元総統）、シンガポールのリークアンユー（元首相）、タイのタクシン（元首相）、フィリピンのアキノ（元大統領）等がその例である。

客家の伝統的生活

1．土楼

福建省西南部や広東省北部を中心に見られる円形土楼（以下円楼）は、客家を中心に利用される伝統的な集合住宅である。2008 年 7 月には「福建土楼」として世界遺産に登録された。円楼は大規模な建築が多くあり、衛星写真でミサイル発射台と間違えられたこともあるという。あたかも山城のようで、客家の団結心を感じさせる建物である。（写真①参照）

円楼の真ん中は広場になっており、そこに神様を祭る祠堂や集会所があり、一階には台所や家畜小屋、二階は倉庫、三階から上は住居に利用されるのが一般的である。生活が不便なので居住者は減っ

【写真①】横から見た客家土楼群と筆者（福建省漳州市南靖県 2009 年 9 月撮影）

お店を構えたり、場所によっては宿泊施設として開放して、現金収入を得ていた。

厦門市から車に乗り 2 時間半程度で行ける漳州市南靖県の土楼の中で最も古く規模も大きい「裕昌楼」は建て始めたのが 14 世紀半ばであり、やや傾いているが 5 階建で、高さは 18.2 m、総部屋数は 269 である。劉、唐、張等の 5 姓の家族が居住しているとのことであった。（写真②参照）

2．生活

様々な家で「家法」「家訓」「族規」等の規則が定められており、忠義孝悌、勤勉、倫理、品行、礼儀等の教育に力を入れていたようである。龍岩市連城県にある客家の培田古民居を訪ねた際に見たある家の「家法」には 10 項目が規定されていた。いくつかの項目では、違反者が出た場合に一族幹部（房長・族紳）に対応を仰ぐことも明記されており、一族の結束が感じられた。婚姻、葬儀、祝い等の相互扶助も一族で行われたようで、「家法厳於国法」（家の法は国の法より厳しい）という言葉がその雰囲気を示している。

中国共産党と客家

客家を語る上で着目すべきは、中国共産党との関係である。同党は 1921 年に上海で成立したが、ソビエト（旧ソ連）のコミンテルンの指示のもとに中国東南部の農村地区で勢力を拡大した。同地域は客家の地盤であったが、鄧小平の尽力により行軍の先々で客家を味方につけたことは、高木の著書（前掲）で詳しく紹介されている。

歴史的に有名な中国共産党の長征（1934 ～ 1936 年に行われた江西省・瑞金から陝西省・延安への行軍）を生き延びた幹部の多くが客家であったという。その際の八路軍（国民革命軍第十八集団軍）の総司令官は朱徳、参謀長が葉剣英で、共に広東省梅県出身の客家だったことは注目に値する。後に国家指導者の一人になった葉剣英は晩年に広東に戻り、そこで強固な権力地盤を築いた。そのような環境下で息子の葉選平は広東省長となり、北京中央から距離を置き、華南地区で経済特区を中心とする開放政策を進めていく。1979 年以降に指定された厦門、汕頭、珠海、深圳、海南島という5つの経済特区は客家を含む海外華僑の主な出身地であり、彼らとの連携を意識して決められたことは言うまでもない。

客家の国際的なネットワーク

客家同士は出身地を気にせずに「自家人」（ツージアレン・内輪の人）として幅広く連携できると言われている。マラッカ出身の客家であるゴーケンスイは、リークアンユー（前出）の片腕としてシンガポールの金融・証券業務の発展基盤を作り上げた。彼が鄧小平に経済特区建設のアイデアを提供したといわれており、1985 年には中国沿海経済開発顧問に就任している。また中国における国有企業改革において、主要産業の株式を政府が保有するというシンガポール流のやり方が採用されたのも、偶然ではないだろう。

中国という国を再認識する

客家は中国の近現代史において重要な役割を果たしてきたが、公式な記録には殆ど登場しない。しかし我々が中国を見る時には、血縁、地縁、そして客家を始めとするエスニックグループというインフォーマルな要素も加味する必要があるだろう。

話は変わるが、アモイに住んで感じたのは福建や台湾への親近感であり、北京との心理的・物理的距離感だった。アモイの人々は政治にあまり興味がなく、日々の生活を楽しんでいるように見えた。また街中には沢山の台湾企業があり、飲食を含めた文化にも台湾の影響が溢れていた。政治的な雰囲気は極めて希薄だったと言ってよい。

ある会食の際に在アモイの台湾企業会・会長から聞いた言葉が記憶に残っている。「我々にとって国という存在は重要ではない。商売ができる環境があればそれでよい」というものだった。それは台湾人という特殊な立場からの発言だったのかもしれないが、見方を変えれば国という存在については関心がないとのメッセージにもとれたからある。

17 年間を過ごした福建省を去る時に、習近平の胸中にはどのような思いが去来したのだろうか。それはきっと、福建人を、客家を、そして台湾人を、どのようにしたら「中華民族」として包摂できるのかという深い悩みであり、それをやり遂げなければという強い使命感だったに違いない。

（あきほ さとし・アジア研究所特任教授）

【写真②】裕昌楼（福建省漳州市南靖県 2009 年 9 月撮影）